
夕焼け純情ラプソディ

天ヶ森雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕焼け純情ラプソディ

【ノード】

Z02865

【作者名】

天ヶ森雀

【あらすじ】

鶴庭子様の昭和企画に勝手に参戦させていただきました。
ぎやあ、『めんなさい！（つい色々な意味で土下座モード・汗）

お題：

* 男……	鈴木 健二
* 女……	佐藤 優子
* 高校一年生。	
* 恋愛モノである」と。	

- * 必ず一話読みきりである」と。
 - * 昭和な匂いをプリンプリン出す事。
- 恥ずかしげもなく甘酸っぱい（？）話を出版したんですが… え、 え
ついでしゃべ…（汗）

(前書き)

鶴 庭子様の昭和企画に勝手に参戦させていただきました。
他にも素敵な作品がたくさんありますので是非どうぞ！

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/106764/blogkey/161261/>

「ついてけない…」

机に突っ伏した私を、鈴木健一が「どうした?」と振り返る。

高校入学のお祝いで買って貰ったセイコーの腕時計は5時半をさしていた。教室にはもう、私達しかいない。回収したプリントは集めて集計し終わつたから、あとは鈴木が日誌を書き終われば週番の仕事は終わりだった。

グラウンドから野球部の練習の掛け声だけが響いていて、放課後に相応しい薄暗さが教室を覆つている。
だから、つい本音が漏れただと思つ。

「だつて…高校生になつた途端、こんなに世界が急変するなんて思つても見なかつたんだもの…」

「そうか?」

「そうだよ~」

机の下で足をジタバタさせながら、私は駄々を捏ねる子供の様に言つた。

「朝シャン当たり前だし、制汗剤欠かさないし」

頭を洗うのは夜お風呂に入つた時じゃないの? 体育もないのに汗なんかかくか?

幼なじみのヨツチンなんか、スカート丈こそまだ膝下十センチより長くはなつていないので、色付きリップを欠かさなくなつた。しかも「ネンネの優子には必要ないだろうけど」とかぬかして笑いやがつた。

一緒にペッパー警部の振り付け練習してた頃は、平氣でパンツ出して踊つてたくせに。ソックタッチでも塗つてろよ~。

高校生になつた途端、そんな風に周りが急に色氣付き始め、私は

一人取り残された気分。焦ると言つより混乱していると言つのが近いかも。

「そういう佐藤は、中学の頃と全然変わらないもんな

鈴木の苦笑が余計に腹立たしい。

「悪かつたわねえ！ どうせ猫つ毛でブローが無駄な上に、そばかす鼻ペちゃですからね！ 色氣付いたって似合わないもん！」

「そうだな」

「そこ！ 肯定するなあ！」

腕を振り回す私に肩を竦めて見せながら、鈴木は書きかけの週番日誌にシャーペンを滑らせる。

薄暗さに文字が見辛いのか、何度も眼鏡の位置を直しながら。

鈴木でさえそんな大人の余裕を見せるから、私は益々悔しくて寂しくなった。

あんただつて同じだよ？

中学までは他の男子同様、校則通りの丸刈りだったのに、高校生になつた途端髪なんか伸ばすから、別人みたいに見えてくる。

ねえ、私、あんたがそんなサラサラな髪なんて知らなかつたよ。あんたは真壁俊か？ 久住智史か？ どうからキュー・ティ・クル注入してるんだ！！

「佐藤…視線が痛いんだが…」

「私をおいて大人の階段昇る皆が憎い…」

「何を訳の解らん事を…」

「ぶう〜〜〜」

不貞腐れている私を見かねたのか、週番日誌を閉じながら、鈴木はおもむろに切り出す。

「まあ、そう言つなよ。今度『カリ城』のビデオ見せてやるから」

「え！ 買つたの！？」

「確かに一万以上するのに！」

「晃一とお年玉、出しあつた」

鈴木はそう言つてニヤリと笑う。

晃一は鈴木の双子の兄貴だ。二卵性で似てないけど、兄弟揃つてアニメが好きで、それが縁で私も彼らと親しくなったのだ。

ちなみに晃一は剛毛っぽいくせつ毛で、人好きのするやんちゃな悪がきタイプ。鈴木（健一の方ね）はどちらかと言えば物静かで読書好き。双子でもこんなに違うのって珍しくない？

にしても『カリ城』！

「いいなあ！ うちなんかビデオデッキがないもん！」

しかも奴等と来たら、データデッキ持つてるの！ 『画質もすげく綺麗なんだから！』

「今度の日曜日、見に来る？」

「いいの？ 行く行く！」

私は不貞腐れてた事などすっかり忘れてはしゃぎ声になつた。
きやー、『カリ城』見たかったんだ！

「晃一もいるの？」

「いや、それは聞いてないけど…佐藤って兄貴だけ名前で呼ぶよね」「うん、まあ。何となく晃一はそう呼びやすいし」

ちなみに鈴木を苗字で呼ぶのは最初に知り合つたのが彼の方だから。中学の図書委員で一緒になつたのだ。

最初から名字呼びだったから、今更健一なんて呼びづらい。何となく恥ずかしいと言つたが、ね。

「まあ、いいけど。ついでに爆風の新しいアルバム買つたからダビングしてやるよ」

「わ～い、ありがとう… 60分テープ持つてけばいい?」このあ

いだアクシア買つたばつかなんだけど」

「うん、確かそんくらい。予備があつたからそれに録音して交換な

「ラジヤ!」

「マイケル・ジャクソンの新譜もあるけど?」

「う～ん、洋曲はいいや

「あ、そ

何と奴等はCDデッキも持つてゐるのだ。うちにはラジカセだから、ダビングしてもらえるのはすこく有難い。やっぱ持つべきものは同じ趣味の友達だよね～!

「ちなみに…」

「え?」

何故か鈴木は、急に言ひにくそうに口をすまめる。何?

「アルバムの中に『青春つつしんべん』て曲あるんだけど…知つてる?」

「爆風の? ん～ん? 知らないけど、いい曲?」

爆風は『ランナー』から好きになつた。でも他の『ミミカル』の結構好き。

だけど鈴木は口をつぐんだまま答えない。

「……」

「なんだよお、気持ち悪いなあ。はつきり言いなよ」

「いや、佐藤にはちょっと早いかも知れない」

眼鏡の弦を中指で抑えながら、ようやく鈴木はモゴモゴ言つた。

うわ、何となくその言い方が癪に障る。

「鈴木も私の事、そりやつてバカにするんだ」

「そうじやないけど…」

「じゃあちゃんとそれもダビングして。聴いてから考えるから」

半ば意地になつてそう言つた。鈴木がなんでそう言つたかなんて考えもせずに。

「…分かった」

鈴木はシャーペンを缶ペンにしまいながら、私を見ずに答える。
私も意地になつて何も言わなかつた。

やだな。

何で皆変わっちゃうの？

変わりたくない私が悪いの？

鈴木のさらさらな前髪が私を落ち着かなくさせる。
なんで？

今まで通り、普通に喋つていてほしいのに。

このままじゃダメなのかな。

そう思つ私がおかしいの？

「終わったから帰るぞ」

鍵を閉めようと入り口で呼ぶ鈴木に、私は学生鞄を抱えてとぼとぼ廊下に出る。

西に面する廊下は、薄暗い教室とは逆に夕陽をめいいっぱい窓に映して眩しかつた。思わず目を眇める。私の後ろで、鈴木が力チャーンと教室の鍵を閉める音がした。

「佐藤」

「え？」

真つ赤な夕陽にに氣をとられていた私は、思わず素直に振り返る。
不意に暗闇に覆われ、唇に一瞬、何かが触れた。

「…そういう曲だよ

夕陽に照らされて、鈴木の顔がよく見えない。

「…そういうつて？」

声が掠れた。真つ黒な闇に見えたのは、接近した鈴木の体だつた。
黒い詰襟が闇に見えたのだ。

「だから…不純異性交遊の歌」

「ふ、ふじゅんいせい…？」

うまく脳が働かない。語句が漢字に変換できない。今、唇に触れたのは何？

「俺は……佐藤がイヤならそのままでもいいと思つけど……」
頬が熱い。夕陽のせいかな。鈴木も赤い。「うん、きっと夕陽のせいだな。そうに決まってる。

私たちの間に何かが起きたなんて、認めたくなくてそう思い込もうとした。

「でも変わりたくなつたらいつでも言つて。協力は惜しまないから

何言つてんの？ 何言つてんの？

世界が突然ひっくり返つたような気分。急変なんてもんじやなかつた。

激変？ 豹変？ 天変地異つてこんな風！？

大陸変動、天地流転、驕れる者は久しからず、頭の中で法則のないしつちやかめつちやかな狂詩曲ランディが流れてる。
何？ な、何が起こつてるんだ～～～！！！

「鼻ペちゃ も悪くないよ。鼻がぶつかなくてけりよつどい」

そんな風におどけて言つから、それが照れ隠しなんて氣づきもせずに、思わず私は思いつきり彼に学生カバンで殴りかかつた。

「馬鹿！！ 馬鹿！！ 鈴木なんか大つ嫌い！！！」

「わ！ 悪かつた！ 「ごめん！ わかったから物を投げるなー！」
そう言われてもこつちは、もつどうにも止まらない。

「やっぱ、メガネ…！」

「え？」

すべて外れたメガネが床に落ちて、裸眼の目と思いつきり視線がぶつかつた。

やだ、意外とまづげが長い。

……じゃなくて！ 何考えてるんだ私は！

視線が合つたまま動けなくなつた私に、鈴木が低い声で呟いた。

「「めん… 悪かつた…」

そんな風に素直に謝られたら、どうしたらいいの。

「鈴木のばか…」

力なくその場にしゃがみこんで、私はぐずぐず泣き始める。
こんな時に泣く様な女は嫌いだつたはずなのに、今は泣く事しか
できなかつた。

だつて… どうしたらいいかわからないんだもの…。

「… 曜日、来るだろ?」

「…」

「来るよな?」

「…」

「… もう何もしないから」

「… 本当?」

「… 本当」

「… 絶対?」

「… 約束する」

「絶対だね?」

「神に誓う」

キリスト教徒でもないくせに。

「… じゃあ、行く」

「爆風、ダビングしとくから」

「… うん」

「日誌、置いてくる。やつしたら帰ろう」

「… の詫びにメローライローおひつてくれる?」

「… 解」

少し切なげに苦笑して、鈴木は口誌を持って職員室へと歩いていった。

夕陽はもう地平線に沈み始め、空には薄墨が横たわり始めている。私はしゃがみこんだまま、膝に顔をうずめて必死で平常心を取り戻そうとした。

変わっちゃうのかな。
私も変わっちゃうのかな。
でも……

鈴木の真っ赤な顔を脳内でリプレイしながら、大きく息を吐く。何となく、彼を名前で呼んでみたくなつた。彼も私を名前で呼びたかりする？

『優子』

そう呼ぶ彼を想像したら、顔がほてるのが止まらなくなつた。うわ、うそ！ 今、鈴木が戻ってきたら、赤面してるのモロばれじゃん！ もう夕陽のせいにだってできないよ！

鎮まれ私！ 鎮まれ私！

それより、どうしよう、日曜日。

行くつて言ったから行くけど。

本当に何もしないかな。

いや、約束はちゃんと守るだろ？ あれで結構真面目だし！
でも……

「そつか、何もしないのか」と思わず呟いてしまったのは、恥ずかしきて、口が裂けても絶対言えない。

(後書き)

「青春じゅうしんべん」は昭和の名曲ですね（笑）。
アクシアのCM、斎藤由貴ちゃんの「かなしい小鳥」も好きでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0286s/>

夕焼け純情ラプソディ

2011年4月2日21時57分発行